

史 跡 福 山 城 V

昭和62年度 発掘調査概要報告

1988・3

北海道松前町教育委員会

序

国指定史跡福山城は、昭和50年度に史跡福山城保存管理計画が策定され、環境整備事業に係る遺構確認調査は、昭和55年度以来6ヶ年を経過することになりました。

この間、内掘調査の成果をもとに修復工事を終え、おかげをもちまして、本丸周辺は本来の景観の再現に一步近づくことができました。

本年度は、松城小学校々舎解体跡地の南側部分の発掘調査を実施いたしました。このあたりは、かつて本丸表御殿の4棟の建物が立ちならび、福山城の中樞をなしていた部分であります。調査の結果、多数の遺物とともに、本丸表御殿の最も南側棟の建物礎石、福山館時代の建物礎石、本丸御門から西側へつづく土塀石垣の基礎部分、更には中世墳墓が発見されました。これらは、中世から明治に至る福山城の変遷の一端であり、出土遺物は、当時の生活の一部を物語るものであります。解体跡地は継続して発掘調査を進める計画であります。本年度の成果を踏まえ、本丸表御殿建物と周辺建物、施設の全貌を明らかにし、今後の環境整備に資する所存でございます。

この事業の推進にあたり、文化庁、北海道教育委員会をはじめ関係各機関、諸先生方に種々ご高配を賜りました。心から厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和63年3月

松前町教育委員会

教育長 神 正 雄

例 言

1. 本書は、史跡福山城の昭和62年度環境整備事業に伴う遺跡確認調査の概要報告である。
2. 本年度の調査は、昭和62年7月6日から10月6日までの間、次の体制で実施した。

調査主体者 松前町教育委員会教育長 神 正雄

発掘担当者 松前町教育委員会 久保泰

調査参加者 森田潤一、赤松順子、川村節子、福井富子、和田映子、斉藤りん子、扇野
美喜子、佐々木友美、河田教子

調査事務局 松前町教育委員会文化財課

3. 本書の編集、執筆、写真撮影は久保があたった。
4. 遺構実測図整理・トレースは、赤松があたった。
5. 遺物実測図・トレースは、川村・佐々木があたった。
6. 本年度の調査、整理作業にあたっては、下記の諸機関、各氏からご指導、ご協力をいただいた。（順不同、敬称略）

文化庁記念物課、北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、松前町史編集室、長府博物館、仲野浩、加藤允彦、佐藤信、前田熊、田村安藏、永田富智、大橋康二、松崎水穂、森広樹、長沼孝、藤島一己、鈴木正語、前田正憲

7. 調査によって得られた資料、諸記録は、松前町教育委員会が保管する。

目 次

I 調査の概要	5	III 遺 物	28
II 遺 構	6	IV ま と め	43

挿 図 目 次

第1図 史跡位置図	4	第14図 中世墳墓実測図及び出土遺物	25
第2図 史跡周辺の地形図	7	第15図 縄文時代ピット実測図	26
第3図 調査位置図	9	第16図 出土遺物実測図 (1)	27
第4図 本丸表御殿実測図 (1)	11	第17図 出土遺物実測図 (2)	29
第5図 本丸表御殿実測図 (2)	13	第18図 出土遺物実測図 (3)	30
第6図 本丸表御殿実測図 (3)	14	第19図 出土遺物実測図 (4)	32
第7図 土 層 図	15	第20図 出土遺物実測図 (5)	33
第8図 礎石下部土層図	17	第21図 出土遺物実測図 (6)	35
第9図 南西隅便所実測図	18	第22図 出土遺物実測図 (7)	36
第10図 本丸表御殿玄関部分実測図	19	第23図 出土遺物実測図 (8)	38
第11図 井戸跡実測図	20	第24図 出土遺物実測図 (9)	39
第12図 西塀石垣基礎実測図	22	第25図 出土遺物実測図 (10)	40
第13図 不明建物実測図	24	第26図 出土遺物実測図 (11)	42

写 真 目 次

図版1 調査状況・遺構	47	図版7 出土遺物 (1)	53
図版2 遺 構	48	図版8 出土遺物 (2)	54
図版3 遺 構	49	図版9 出土遺物 (3)	55
図版4 遺 構	50	図版10 出土遺物 (4)	56
図版5 遺 構	51	図版11 出土遺物 (5)	57
図版6 遺 構	52	図版12 出土遺物 (6)	58



第1図 史跡位置図

I. 調査の概要

1. 調査の目的

史跡福山城は、慶長11(1606)年、松前家5世慶広による福山館の築城、安政元(1854)年、17世崇広によるわが国最後の旧式法による築城、明治維新後の取り壊し、太平洋戦争中の国鉄松前線の敷設工事などを経て今日に至っている。

史跡地は、文化庁、道教育委員会の指導を受け、昭和50年度には史跡福山城保存管理計画が策定され、環境整備事業の一環としての遺構確認調査は、本丸内を中心に昭和55年度以降実施してきたところである。

本年度は、旧松城小学校解体跡地を主体に調査を行なった。昭和58年度に解体調査された同校は、維新後の取り壊しを免れ、明治8年10月、福山城本丸表御殿の建物を利用し開校し、函館管内公立校の嚆矢とするものであった。その後明治33年、御殿旧材を利用しつつ新校舎に建て替えられ、幾多の増築を経て解体時に至っているのである。概に昭和60年度の発掘調査で、解体跡地188.5㎡を調査したところ、32個の御殿の礎石を確認している。明治33年の新校舎建築では、御殿の礎石をある程度残しつつ進められたものであると判明し、御殿建物の解明に希望がもたれていたところである。

この結果を踏まえ、今年度の調査は本丸表御殿のうち、最も南側の1棟部分を確認することを第一義としたのである。加えて、現存する本丸御門（重要文化財）から西側に延びる塀の延長を確認、調査することとした。

これらの遺構は、次年度以降も継続して検出に務める予定であり、調査終了後は、環境整備に着手の計画となっている。

2. 調査方法

松城小学校解体調査時に、学校の布石・東石は動かさずそのままにしておいた。これは、抜き取りによる攪乱を防ぐためと、学校で用いていたものが、御殿の東石等を原位置で再使用している可能性が考えられたためである。したがって、調査の結果を持って、不用の石は抜き取ることとした。

従来のとおり、磁北にしたがった5m×5mのグリッドを設定した。グリッドは、過去の調査区と整合するようにしてある。土層観察用の畦は、後世の攪乱の少ないとみられる地区を選び、東・南側を30cmずつ残した。学校存続時に植栽された樹木を一部伐採の後、全て人力により調査に着手した。

調査の目的が明治元年当時にあった御殿建物跡の検出であるため、先ず、昭和60年度調査で確認した面までの掘り下げを行なった。その結果、礎石が残るのは校舎の建っていた部分のみ

であり、しかもこれすら、明治以降の擾乱のための遺存状態は良くなかった。

調査区全体を若干掘り下げてみたが、敷地に互る建て替えがあることが分った。また、城址とは直接の関係はないが、中世期の遺構（墳墓）があることも分り、その下部には縄文時代の集落址の存在も予想された。福山館築城期あるいはそれ以下の面まで全面調査することは、予算、期間はもとより、当初目的とする遺構面を破壊することに繋がり、破壊の心配のない一部分だけの掘り下げとした。また、東石等の掘り方（地業）の土層観察は、遺構の保存という観点から最少限に止めておいた。

西塀跡の確認調査は、当初、トレンチ方式により行うものと計画していたが、遺構確認に思っているのは手間どったため、2ヶ所のみにせざるを得なかった。

調査終了後は、学校の布石、東石は人力により搬出し、全面10cm以上の厚さに砂を敷き、埋めもどしを行なった。確認した西塀の基礎部分2ヶ所と、御殿南側棟の南西隅の便槽跡には、コンクリート杭（12×12×60cm）を埋設しておいた。

3. 層 序

土層観察用の畦は、I-6区～L-6区と、EJ-1区～EL-1区、EJ-1・2区を残した。これらのグリッドは校舎の下部にあたり、比較的擾乱の少ないとみられる調査区であった。しかし予想に反してかなりの擾乱を受けていた。これら擾乱部を除いて、最終期の御殿基盤のレベルは25.30m前後であると判明した。明治33年の校舎新築時には、これより20cm以上の盛土をしていることが分った。この整地層中には塗喰を混ぜ、白樺の皮を敷いていたことが判明した。白樺の皮は、おそらく湿気防止のためと思われる。

基盤ロームには25.0m付近で違えるが、これがおそらく、慶長11年の福山館創建当時のレベルとみられる。1区、2区付近では、縄文期の包含層を削り取るほどの整地をしているようである。この慶長期の面から最終期の御殿のレベルまで30cm以上の堆積があり、これが慶長から文化年間（文化年間とした理由は後述する）までの層と見てよい。これらの層には、木炭が大量に混じる土層があり、寛永14（1637）年3月の火災に関係があるものかもしれない。

今年度の調査では、後述するように、本丸表御殿は少くとも4回の建て替えがあったとみられる。しかし、土層図を見る限りでは、層序的に的確に把握しきれなかった。

なお、6区付近には縄文期の包含層が残る、一部遺構らしいものもあったが、上述した理由により調査はしていない。

II. 遺 構

1. 本丸表御殿

調査区は第2図、第3図に示したように、学校の南側棟の解体跡地を主体にしてある。学校

で用いた布積石・東石を見極めながら調査を進めた結果、第4図に示したような礎石その他の配列を見た。学校の東石は御殿のそれよりはレベル的に20cm近く高く、念入りの地盤はなされておらず、概して小さな石を用いていた。御殿の礎石をより明確にするため、当時の整地面より若干深く掘り下げたところ、第4図に示してあるとおり、学校の建物を除き、少なくとも4期に亘る建物のあることが分かった。以下、順にその遺構の概要を示す。

I 期 (第4図水色)

調査区の東側及び西側の両端部から発見され、中間部からは確認されていない。両グループはかなり離れているものの、石列の方向が同一であり、レベルからみて、同一期とみてよいのではあるまいか。中間部は深く掘り下げていないため、深掘りによっては検出される可能性は大きいとみられる。東側からは8個、西側からは17個で、いずれも川原石である。表面が平坦で、坐りのよい石を選定しているようである。これらの礎石は、特別の加工はせず、素掘りのまま据えられている。柱間寸法は190cm(6尺3寸)程度を基本としている。

なお、K-1区の礎石周辺からは、中国産(明代末)の染付がいくつか出土している。

II 期 (第4図赤色)

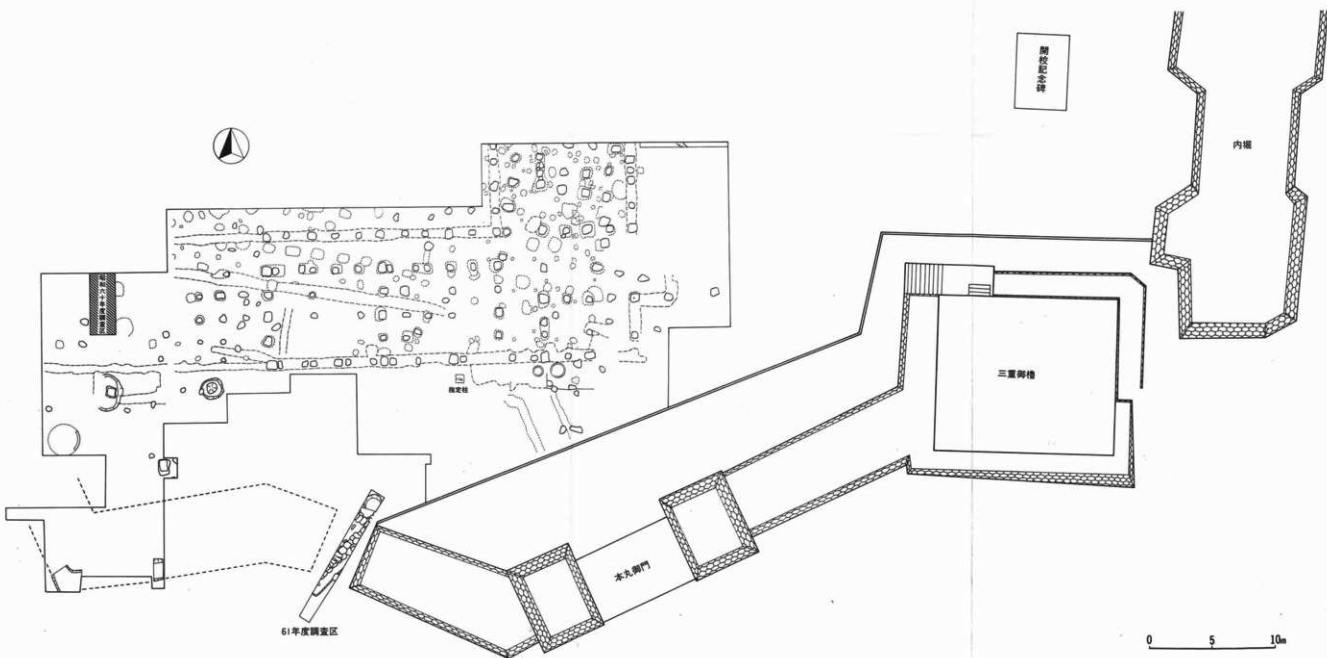
H・I・J-0・1区付近から確認されたものである。大きく北群の根固めの石の残るものと、掘立柱痕のグループ(南群)があったが、一括してII期としてある。これらは、この付近だけ深く掘り下げたため検出できたもので、今年度の調査からでは、どのような広がり方をしているか不明である。

南群は柱間寸法も一定せず、その配列状況から見て、今一つ建物遺構かどうか確信はもてない。これに対し北群は、礎石はすべて抜き取られているものの、地盤の様子がある程度把握できた。第8図2に示したように、30cm程掘り凹め、拳大の根固めの石を据えているものであった。この石は、松前産の赤味がかった凝灰岩(グリーンタフ)の割石で、これがかえって見分けを容易にした。この根固めの石の痕跡をもとに確認したのが北群である。根石の並びはやや不揃いながらも、柱間寸法は6尺強で、I期のものに近い。また、方向はIII期のものに似る。

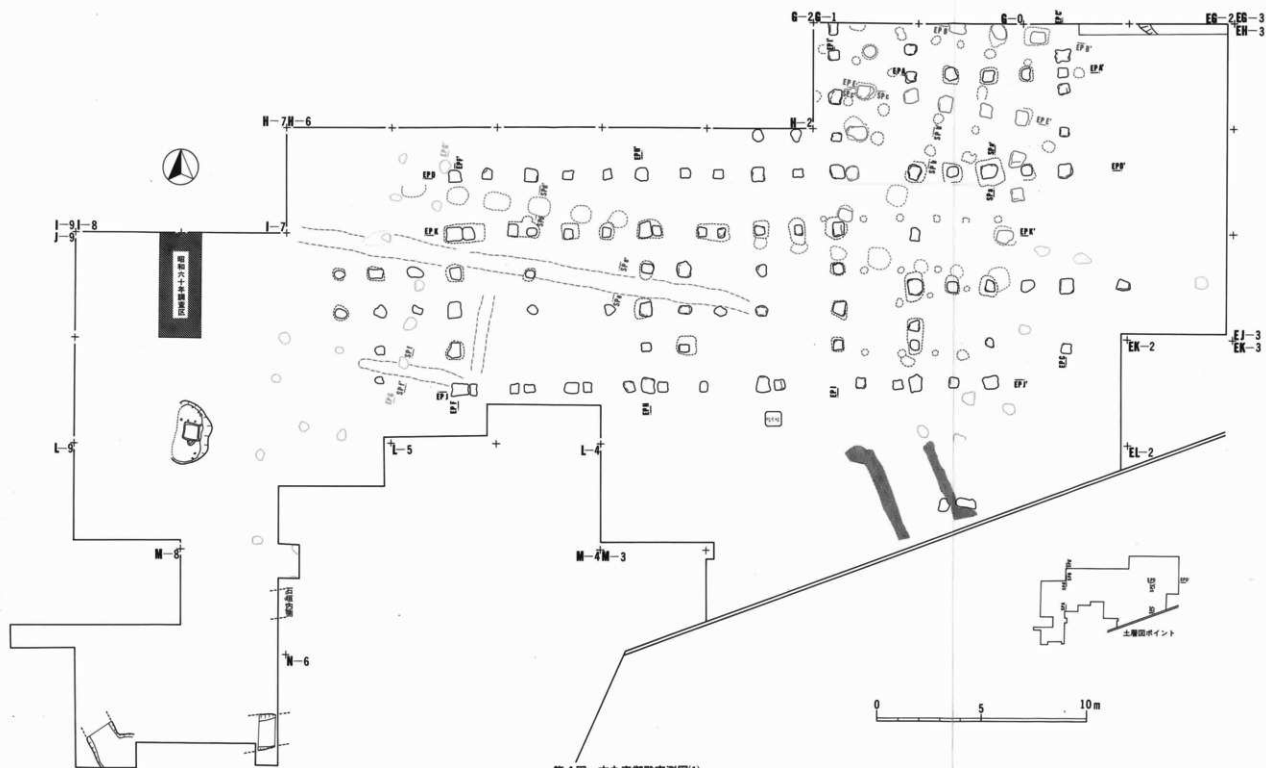
III 期 (第4図青色)

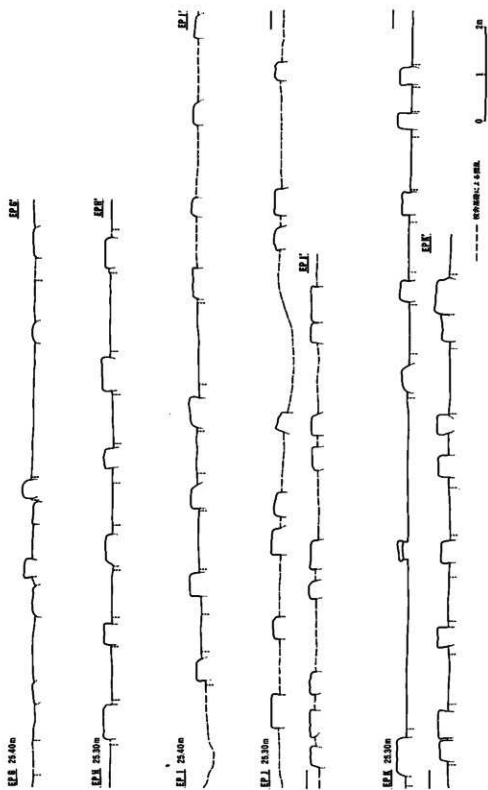
調査区の北側から15個の礎石と14カ所の抜取痕、これに付帯するとみられる溝跡が検出された。使用されている石は、グリーンタフの切石と自然石が若干あった。この切石は次のIV期のものより大きく、自然石もI期のものよりはるかに大きい。柱間寸法は、6尺強である。礎石の大きさ、抜取痕の配列状況からすると、かなり大きな建物の跡とみることができる。礎石のレベルは、IV期よりはむしろ約10cm程度高く、IV期の存続期には、これら礎石のほとんどは手つかずの状態に残っていたのであるまいか。抜取痕の埋土には、かなりの量の漆喰が混じり込んでおり、学校建築時の抜き取りと推定されるのである。

第8図3～6に礎石、抜取痕、溝の断面を示しておいた。これらによると、礎石は、素掘りしたうへ、底に若干の礫を敷いた後、石を据えるようであり、IV期のそれに比べて簡素な手法であることが分かる。溝は、建物と並行しているものは雨落ち溝、鍵の手に折れるものは排水



第3図 調査位置図





第5図 本丸堤御殿実測図(2)

EPA 25.00m

EPA'



EPR 25.00m

EPR'



EPC 25.50m

EPC'



EPL 25.00m

EPL'



EPL 25.50m

EPL'



EPL 25.50m

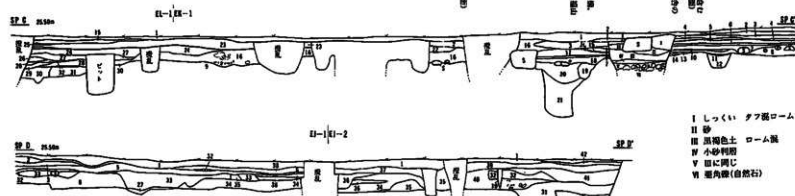
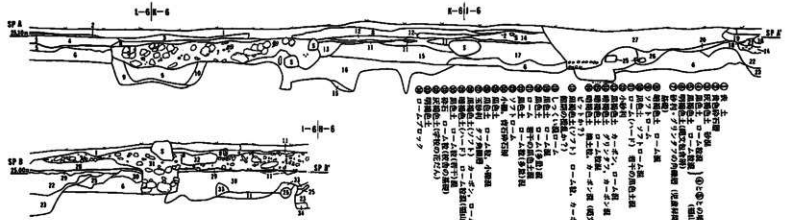
EPL'



—— 校舎基礎による傾斜

0 1 2m

第6圖 本丸段敷測圖(3)



- ① 黄土
- ② 細かい泥ローム
- ③ 黒褐色土 礫層
- ④ 黒色土 ローム状
- ⑤ 黒褐色土 礫層
- ⑥ 礫層ローム
- ⑦ カーボン質砂層
- ⑧ 暗褐色土 カーボン(若干)混
- ⑨ 地山ローム
- ⑩ カーボン
- ⑪ 灰白色火山灰
- ⑫ 暗褐色土 ソフトローム混
- ⑬ 黒褐色土 カーボン混
- ⑭ 褐色土 ローム混
- ⑮ 灰 層
- ⑯ 黒褐色土 灰、カーボン、ローム混
- ⑰ 黒褐色土 ローム粒(多量)混
- ⑱ 暗褐色土 超ローム混
- ⑲ 黒色土(ソフ)
- ⑳ ソフトローム
- ㉑ 黒色土 ローム混(ソフ、ボロボロ)
- ㉒ 砂利層
- ㉓ 石灰質 ガラス混
- ㉔ 黒褐色土 ローム粒混(湖山域生遺物)
- ㉕ 砂 層
- ㉖ 黒褐色土 ローム(若干)混
- ㉗ 黒褐色土 ローム混
- ㉘ 黒褐色土 カーボン混
- ㉙ 褐色土 焼土粒混
- ㉚ 褐色土(かたい) ローム混
- ㉛ 黒色土 ローム状混
- ㉜ ワーム
- ㉝ 灰層、カーボン混
- ㉞ 木炭層
- ㉟ 褐色土、カーボン、小礫混
- ㊱ 灰褐色土
- ㊲ 褐色土 ローム粒混
- ㊳ 小礫とカーボンと灰(松城小学校グラウンド)
- ㊴ 小 礫
- ㊵ 青色砂石 ローム粒混
- ㊶ 灰層、カーボン混

0 1 2m

用かとも思われるが性格不明である。

建物の主体部は次年度以降の調査区に広がっているようであり、さらに明確にしたいと思う。

Ⅳ 期（第4図黒色）

礎石は、調査区内でも5区あたりまでは比較的遺存状態がよいが、6区、7区にはほとんど残されてはいなかった。また、校舎から外れる部分には全く残っていなかった。前者の理由はよく分からないが、後者については、美観上の理由と児童への危険防止などの理由により抜き取られたものと考えられる。後述する明治9年の図を参考にすると、校舎外にはもう1列あってもよさそうであるが、抜き取り痕すら発見できなかった。また、雨落ち溝、排水施設のなものは発見されていない。礎石の並ぶ方向は、学校の布石・東石の方向と全く同一であった。

御殿の礎石として使用された石の石質は、松前産のグリーンタフの切石を主とし、一部笏谷石・自然石を用いている。笏谷石・自然石を用いた場合には、掘り方（地業）は着取できない。配列上欠けている部分は、あるいは、こうした石材を用いたため、学校建築の際に抜き取られ、その痕跡すら残らなかったためかもしれない。グリーンタフを用いている場合には、第8図1に示したように、石垣積ほどではないにしろ、割石や砂を用いるなど、かなりしっかりした根固めをしている。

なお、EPC-C、EPD-D、EPJ-JとEPI-Iの一部は、学校の布石を取り除いたところ、その下部から発見されたものを計測した部分である。配列状況が他の礎石と同一ライン状に載るものがほとんどあり、一応御殿に関係のあるものと考えておいた。しかし、偶然の一致なのかもしれない、今年度の調査では確認の時間的余裕がなかったが、次年度では明らかにするつもりである。

Ⅳ期の建物に付設する便所跡と、玄関に伴うとみられる遺構の一部が検出されているもので、これについて若干説明しておきたい。

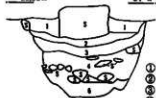
（便所跡 第9図）

この便所跡は、史料によれば南側棟の南西コーナー部に張り出し部をもって設けられ、大・小用各1の小規模なものであるとされる。便所の位置が確認できると、南側棟の南西コーナー部が確定するという極めて重要な場所である。K-7・8区から、一部学校の基礎工事によって擾乱を受けていたものの、便槽の位置を確定することができた。即ち、当時の面から深さ約70cm、70×70cmの方形に掘り込んであり、この壁面コーナーからは、木質の付着した鉄釘が出土した。素掘りではなく、木枠の便槽だったことが分かる。1カ所だけの便槽ということは大使用であり、小便是圓状のものに流し込んだものと思われる。当時の面からすると、掘り込みは浅いようにも見えるが、建物の床からの深さを考えるならば、十分な深さであろう。

（本丸表御殿玄関跡 第10図）

本丸御門の北側左斜め方向にあり、別名「参勤交代」の玄関とも称されたものである。明治33年には原位置から移設され、松城小学校の正面玄関として利用され、昭和38年には道の有形文化財に指定されている。学校解体後は、現在観音台に曳屋され、格納・保存されている。

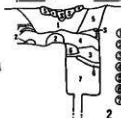
SP a 25.30m SP a'



- ① 黒褐色土 しっくい混
- ② 砂
- ③ グリーンタフ 砕石層
- ④ 砂利 角礫層
- ⑤ 暗褐色土 ローム混
- ⑥ 暗褐色土

1

SP b 25.20m SP b'



- ① 暗褐色土 ソフトローム、カーボン混
- ② ソフトローム
- ③ 黒色土 細かいローム粒混
- ④ 暗褐色土 カーボン混
- ⑤ 明褐色土
- ⑥ ソフトローム ④より濃い
- ⑦ 暗褐色土

2

SP c 25.50m SP c'



- ① 暗褐色土、ローム粒混
- ② 暗褐色土、ローム混
- ③ 黒褐色土、ローム混

3

SP d 25.20m SP d'



- ① 黒褐色土、しっくい、ローム混
- ② 黒褐色土、礫、瓦混
- ③ 黒褐色土、カーボン混

4

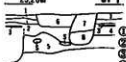
SP e 25.10m SP e'



- ① 黒色土 しっくい、ローム(若干)混
- ② 砂礫層
- ③ 黒褐色土 ローム粒混
- ④ 砂礫 カーボン(若干)、ローム混
- ⑤ 黒褐色土 ローム混
- ⑥ 黒褐色土

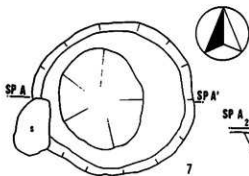
5

SP f 25.20m SP f'



- ① 暗褐色土 カーボン、ローム粒混
- ② 黒褐色土 ローム混
- ③ 黄白色 火山灰層
- ④ 黒色土 ローム粒混
- ⑤ 暗褐色土(縄文包含層)
- ⑥ 暗褐色土(しまりあり) グリントフ砕石、ローム混
- ⑦ 砂利層(2~3cm)
- ⑧ 暗褐色土 砂利混

6



7

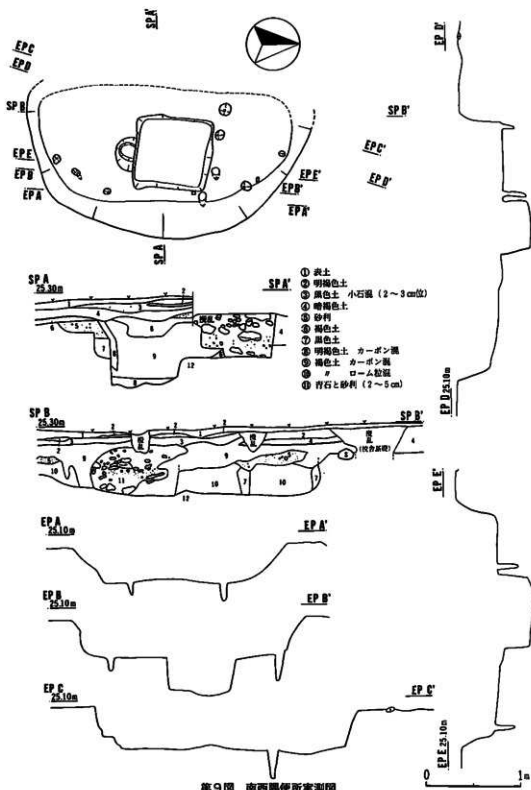
SP A 25.00m SP A'

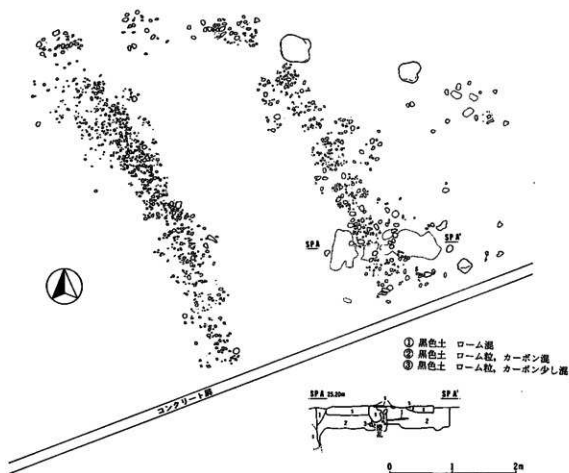


- ① 暗褐色土 ローム粒(少い)混
- ② 暗褐色土 ローム粒(多い)混
- ③ 暗褐色土

0 1 2m

第8図 礎石下部土層図

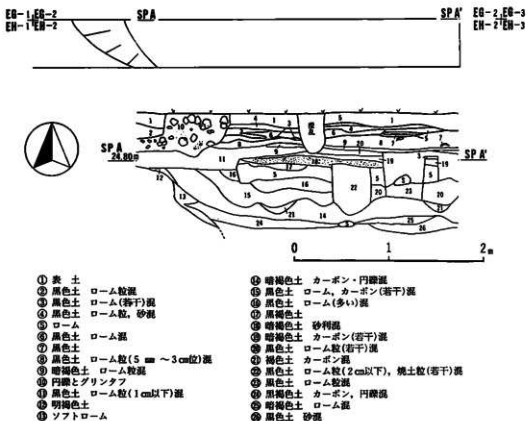




第10図 本丸表御殿玄関部分実測図

現存の玄関の基礎のあり方は、花崗岩の礎石・地覆石を用いているが、これらは、学校の玄関として移設された際、ともに移された可能性の極めて強いものである。したがって、調査の主眼はこれらの採取痕の確認に求めたが、残念ながら、学校の排水溝の埋設等によって、何らの痕跡も得られなかった。

しかし、第3図及び第9図に示したように、玄関と思われる位置から本丸御門に向かって、砂・小砂利が2列に敷設されていることが分かった。この小砂利の間には、笏谷石の風化した切石も発見されている。『福山城Ⅱ』に写真に掲載しておいた「福山城絵図」によれば、本丸表御殿玄関から本丸御門に至る間は、石敷であると表現されている。絵図が正しいとして、今回の調査結果と合わせてみると、砂・小砂利の敷設は敷石の根固めのためと思われ、笏谷石の敷石であった可能性が高い。2列のうち東側の小砂利敷は御門のほぼ中央に向かい、おそらく、これを基軸に、本来は東側にこうしたものがもう1列あって、石敷の幅は5.4m（3間）程度だったのであるまいか。これらの石敷は、福山城の取り壊しの際か、玄関の移設に伴ってとり除かれたものであろう。



第11図 井戸跡実測図

EH-2区の北東隅に、井戸跡らしい落ち込みが認められた。しかし、石枠・木枠等は確認されていない。調査日程の都合で途中までにしておいたが、井戸跡である可能性が高い。縄張

り図等によれば、城址内にはいくつかの井戸があったとされているが、次年度以降の調査で明らかにしたいと思う。

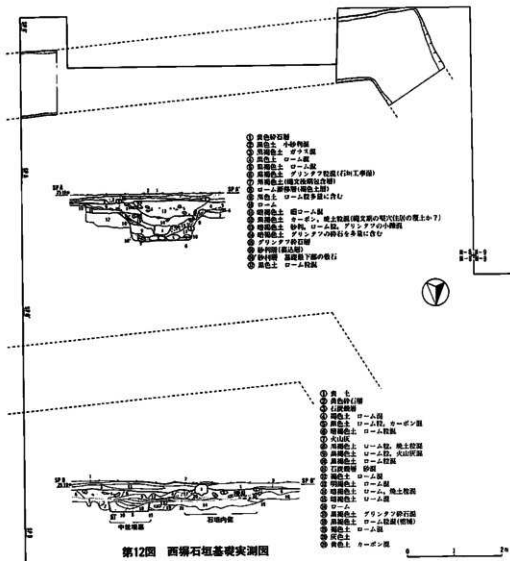
本丸表御殿の最も新しい平面図としては、道文書館所蔵の「官舎倉庫其地官舎絵図表 明治九年十二月 函館支庁」に収録されている「渡鶴岡津軽郡福山旧城内 本丸建物」図がある。この図書によれば「地坪5,468坪4分、建坪1,233坪7分5厘」「創立年月不詳 追テ出張所移転ノ見込ニ付キ存ツキ」と記されている。同図によれば、本丸表御殿の建物は大きく4棟に分かれており、細部では若干異なるものの、安政元年当時の「福山城縄張図」に表わされた建物とほぼ同じである。しかし、同年に著わされた「御新城縄張図」には、他の建物等に関する記載はあっても、本丸表御殿に関するものは一切ない。安政の築城の際に本丸御殿も建てられたのであれば、何らかの記載があってもよさそうなものであり、僅か20年を経たくらいで「創立年月不詳」と記されるのは不自然といわなくてはならない。そうすると、安政元年以前に建てられたものとみなくてはならない。

本丸表御殿の平面図には、このほか、国立公文書館所蔵の「松前奉行所経営地割図」(文化年間ころ)と、道文書館所蔵の「松前御役所御列席諸絵図」(文政辰庚3年)に部分図がある。前者は、『松前町史通説編第一巻下』に収録してあるが、これによると、本丸表御殿は大きく3棟に分かれているのである。特に3棟のうち、最も南側の棟だけは、明治9年の図と比較しても大差はないのである。本丸表御殿玄関の位置は、そのままといってよいほどである。つまり文化年間から安政元年に至る約40年の間、あるいは福島県桑川から復讐する文政4(1821)年以降安政までの間に、旧建物を利用しつつ大規模な増改築がなされたとみることが可能である。

こうして見てくると、Ⅰ期としたものは福山館の築城期(慶長11年)のものとし、Ⅳ期は復讐後の増改築期の可能性が高い。Ⅱ・Ⅲ期については史料等の吟味をしなければよく分からないが、寛永16年に再建された建物が含まれているかもしれない。

2. 本丸御門西塀

本丸御門から西側に延びる石垣がある。正式名称は分らないが、本丸御門西塀石垣(以下西塀石垣)と仮称しておく。本丸御門寄りで若干の後世の積替、手直しがあるものの、基本的には旧状を伝えるものと考えられている。かつては現存する東塀と同様、狭間をもった土塀が西側へ延び、途中で北西側へ折れて、本丸表御殿の南側の防禦をなしていたものである。現在では、本丸御門から西6間(内側で)だけが残っているものである。縄張図によれば西塀石垣はこの部分で一旦切れ、門が設けられ、更に西へ延びていたらしい。この門から西側の全ての石垣は、明治8年に取り壊されたのである。その後、明治末か大正初期のころ、現在の西塀石垣の延長15mにイチ・ウが防風林として植栽され、今では大木となって土手状になっている。この樹木は今では城址内の一定の景観を示している。この部分を外して第3図に示したような調査区を設定した。



第12図に示したように、2カ所を深掘りした結果、N-7区、N-8区から石垣南側(外側)の基礎に相当するとみられる深さ85cm、幅70~75cmの溝が確認できた。石垣は最下部まで完全に抜き取られていたが、石垣積の足場固めと思われるグリーンタフの割石数があった。土層の観察によれば、栗石が若干残っており、裏込めの状況からするならば、溝の部分には石垣が2段に積み上げられていたらしい。N-8区ではコーナー部が検出され、110°で北西方向に折れて延びていることが判明した。なお、この角度は、縄張図では122°に表現されている。

石垣内側に相当する位置からは、外側のような深い溝は発見されていない。また、割石数も検出されていない。幅約1.5m程で、グリーンタフ礫混りの攪乱の著しい部分があり、破線で示しておいたが、おそらくこの部分に石垣が据えられたと思われる。現存の東側の内側石垣は3段積みであり、この程度の高さであるため特別の作工はしていないのであろう。

3. 不明建物 (SB-2)

61年夏、本丸御門防災施設関連の事前調査によって確認されたものである。調査結果は、「福山城Ⅳ」では割愛していたので、本書で概略を述べておくことにしたい。

縄張図によれば、本丸御門西塀には間口1間5尺の門が設けられており、調査地点(第3図)はこの部分に相当する。門については、縄張図・御新城縄張図等にも特別の記載はなく、名称は不明である。現在は、石垣の西面に寄せ掛け柱を据えたと思われる凹みが残るだけである。

幅1m、長さ11.5mのトレンチであったが、第13図に示したような建物の布石積とみられる遺構の一部が検出された。予め深さ70cm程度の溝をつくり、底には小砂利を敷き、間知石を並べているものであった。土層の状況、ボーリングの結果から推定すると、延長7.5m程であり、方向はN49°Eである。石積は、途中で直角に北西方向に延びている。石は2段に積まれ、下段はグリーンタフの間知石で、天端のレベルはほぼ一定(24.60m)に揃えられている。これに対し上段は不揃いであり、グリーンタフが主で、笏谷石がいくつかあった。笏谷石は、厚さ10cm未満のものであった。また、天端は一定していない。

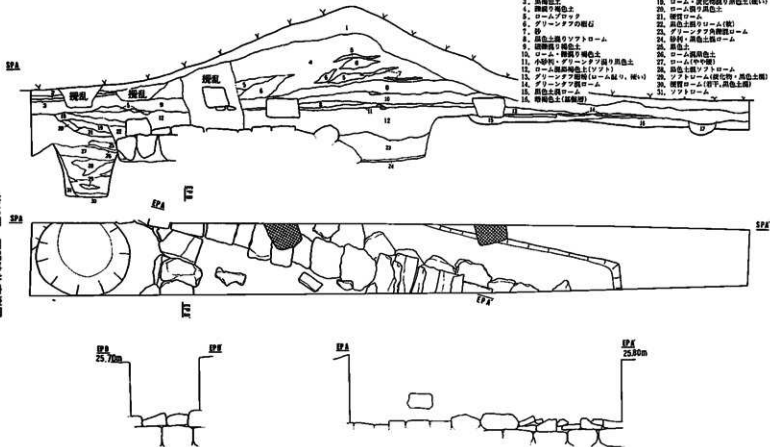
さて、この石積の性格であるが、福山城に伴うものでないことは明白である。福山館の何かの遺構の一部ということになる。前述した「松前奉行所経営地割図」を参照すると、調査区付近には表門が存在していたことになる。この表門は、御殿の棟と平行し、玄関との関係は直角になるよう図示されている。図上では、表門に付設する土塀・欄等は直角の関係で取り付くよう表示されている。前述のように、御殿の第1棟は文化年間当時の建物を基本的に利用しているとみられるから、表門及びこれに付帯する施設は、御殿建物と平行もしくは直角の関係になると思われる。図示された位置関係が正しいとするならば、この石積は文化年間以前ということになる。また、今年度の調査結果を参考にとすると、慶長期の御殿の礎石は自然石を用いているから、幅広くみておいて、寛永16年以降文化年間以前の所産としておきたい。石積は、おそらく何かの建物に関係するものであろうが、史料の検索等を待って結論を得たい。

なお、トレンチ内から、石積とは時期の異なるグリーンタフの切石が2個(スクリーンゾーン部分)が発見されている。レベルからは福山城築城期に合致し、動かされている気配もないから、おそらく門に関係する礎石の一部かと思われる。

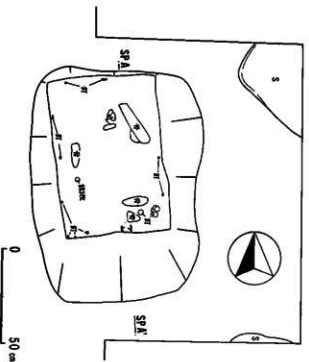
4. 中世墳墓

M-7区。土層観察のため深く掘り下げた結果発見されたものである。墓壇は125×95cm程で、棺の大きさは釘の位置から見て、85×55cmである。長軸方向はN6°Wである。墳底に骨がいく分残っていたが、頭骨の位置が不明で頭位は分らない。出土物は、棺材を止める鉄釘のほか、古銭が8枚あった。古銭には布状の痕跡が付着し、袋に入れられたものか、着衣の一部が付いたものであろう。6枚図示しておいた(第14図)が、判読できたものは3枚だけである。他は錆のため不明である。1は聖宋元寶、2は祥符通寶、3は永樂通宝である。釘は大小不揃

1. 黄土
2. 石灰土
3. 黒褐色土
4. 緑褐色土
5. ローム・ブロッツ
6. グリーンタフの礫石
7. 砂
8. 灰土・黒土・ソットローム
9. 緑褐色土
10. ローム・緑褐色土
11. 小砂・グリーンタフ・黒褐色土
12. ローム・黒褐色土(ソット)
13. グリーンタフ・礫石(ローム・黒褐色土)
14. グリーンタフ・ローム
15. 黒褐色土(礫石)
17. 砂・ローム・黒褐色土
18. グリーンタフ・黒褐色土・ソットローム
19. ローム・灰土・黒褐色土(礫石)
20. ローム・黒褐色土
21. 緑褐色土
22. 黒褐色土・ローム(礫石)
23. グリーンタフ・黒褐色土
24. 砂・黒褐色土・ローム
25. 黒褐色土
26. ローム・黒褐色土
27. ローム(砂・礫石)
28. 黒褐色土・ソットローム
29. ソットローム(灰土・黒褐色土)
30. 緑褐色土(砂・黒褐色土)
31. ソットローム

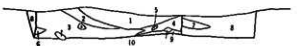


第13図 不明遺物発掘図

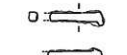
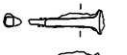
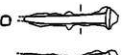


SPA 24.80m

SPA



- | | | |
|--------|--------------------|-----------|
| ① 黒褐色土 | ローム粒 (2cm以下) 混 | ⑥ 黄褐色土 |
| ② 黒褐色土 | ローム粒 (5ミリ以下, 多い) 混 | ⑦ 暗褐色土 |
| ③ 黒褐色土 | ローム粒 (5ミリ以下, 少い) 混 | ⑧ 明褐色土 |
| ④ 黒褐色土 | ローム粒 (若干) 混 | ⑨ 褐色土 |
| ⑤ 火山灰 | | ⑩ ソフトローム混 |
| | | ⑪ ローム |



第14図 中世筑前県栗田川及び出土遺物

いで、長いもので6cm程度で、いずれも木質が付着していた。

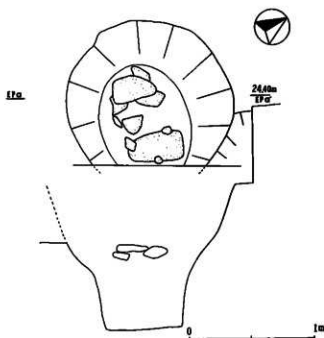
墳墓の年代であるが、永楽通宝（1408年初鋳）があることから、15世紀以降のものであることは勿論であり、墓壇の周辺にⅠ期の礎石が2個見え、調査所見ではこれよりは古い。墓壇の上部は、Ⅰ期の整地によって削平されているのである。そうすると、15世紀中葉から16世紀代の所産と見做すことができる。

この墳墓は偶然に発見されたが、勝山館夷王山墳墓群、町内上川遺跡の例によればいくつか群集して発見されるようであり、まだ周辺にはいくつか存在する可能性は高い。

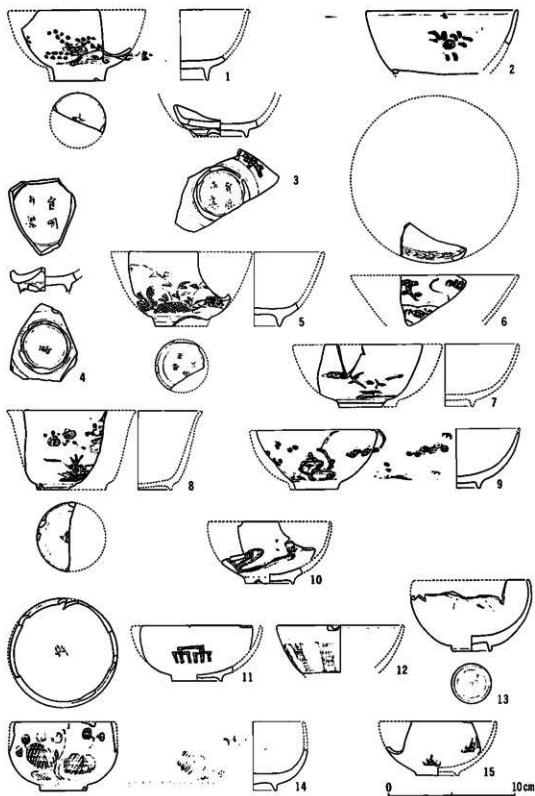
5. 縄文時代の遺構

前述した理由によって基盤層まで下げていないが、過去の調査によってもしばしば縄文式土器が出土している。福山の台地一帯からは、縄文時代前期から後期の遺物が大量に表採でき、松城遺跡として登載されている広大な遺跡であるが、築城・寺院の建立などによって実態はよく分っていない。61年度の調査で、遺構が1カ所検出できたので紹介しておきたい。

S B-2の布石積の下部から発見されたもので、出土遺物から、縄文時代後期前葉（涌元2式）相当のビットである。開口部は1.3mの円形を呈し、確認面からの深さ1.15m、墳底は楕円形である。覆土の中心からは、45cm大の扁平な石など9個発見されている。このビットの北東側に接して、更に古いビットがある。重複関係、他遺跡の例からみて、周辺部にはかなりの



第15図 縄文時代ビット実測図



第16图 出土遺物实例图(1)

数の同様の遺構が存在すると思われる。

なお、ピットの性格は不明であるが、貯蔵穴、墓墳などの可能性がある。

III. 遺 物

本年度の調査によって出土した遺物は、整理箱で7杯分である。調査区が本丸表御殿跡ということもあったが、予想より多いものである。

遺物は、大別すると陶磁器類が最も多く、瓦、金属製品、自然遺物があった。時代別では、縄文時代の土器、明治以降の学童の使用したもの、学校の建物そのものに関するものがあったが、主体となるものは江戸時代から明治に至るものである。

以下、概略を記していくことにする。

1. 陶 磁 器 類

出土遺物中最も多く、小片を含めて1200点に達する。磁器・陶器・伊器・土器があるが器形の分かるものは少ない。産地別では、やはり肥前のものが最も多く、瀬戸・美濃系のもの、関西系のもの、北陸・東北系のほか、中国製のものがあった。前年度の調査では中国製磁器は少量であったが、今年度は約30個体相当の資料があり、16世紀後半から明代末を主に、清朝の磁器が若干あった。

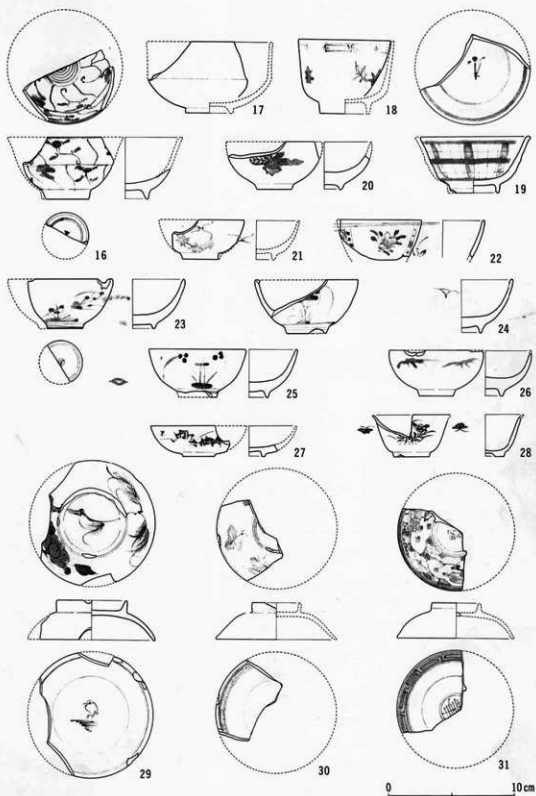
年代別では、19世紀初～幕末を主に、大館からの伝世品とみられる16世紀代のものから明治・大正に及んでいる。器形の分かるものを主に図示してある。

なお、分類は大橋康二氏にお願いしたが、記載の誤りは筆者の責に帰するものである。産地は、特に記載のないものは、肥前及び肥前系のものである。

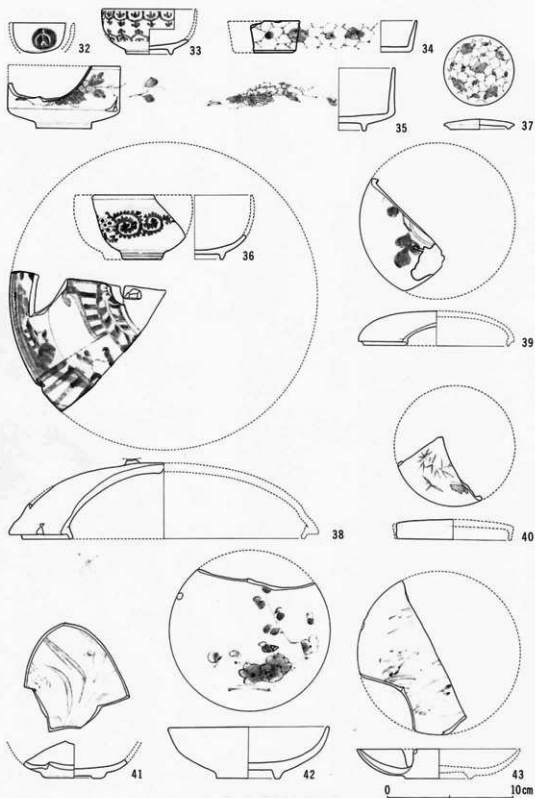
1) 碗 類

碗、蓋、湯呑み茶碗、盃などがある。1～12は飯茶碗。内径の10cm程度のものを碗とした。1、2は17世紀後半のもの、いずれも草花文を描く。1は、高台内に銘が入るがよく分からない。2には、細かい貫入がある。3は、高台内に「宣徳年製」の銘の入るもの。草花文を描くらしく、有田の高級品である。4は見込に「宣明年製」、高台内に「宣」の銘がある。いずれも17世紀後半のもの。5は、コンニャク印判により草花文を表す。高台内に「太明年製」の銘が入る。内面に砂・不純物が付着し、18世紀前半～中葉、雑器窯のもの。6は小片であるが、外面に仙芝祝寿文を描く。18世紀代前半。7～9は18世紀前葉～中葉のもの。7は草花文、8は端反碗で、古木梅と若草文を描く。8の高台内の銘はうず福か。9は、やはり古木梅と若草文のもの。10は二次加熱を受けており、貫入があり、これにスズが侵入している。水中河骨文を描き18世紀中葉から後半のもの。11は、源氏香に似せた文様を描くもの。18世紀中葉～19世紀初頭。12は、寿字柱文が器面を巡るもの。18世紀末～19世紀前半。

13は陶器質で、高台及び高台脇は施釉されず露胎する。内外面とも細かい貫入があり、外面



第17図 出土遺物実例図(2)



第18圖 出土遺物実測図(3)

には鉄軸により草花文を描くらしい。高台内に「イ」の墨書銘がある。18世紀後半～19世紀初頭。14・15は湯呑。14は口部がやや内弯する器形、外面に河骨と高台脇に櫛目文、見込に蝶を描く。18世紀末～19世紀前半。15は、繊細な若松文を描くもの。16は、18世紀末～19世紀代の清国産のもの。見込に同心円文、内外面とも仙芝祝寿文を描くが、呉須が滲み、汚れた感じを受けるものである。17・18は関西系のものか。18は角電光文と楓を描く。19世紀後半のもの。19は格子文を描き、絵付部分の軸が盛り上がる。見込の絵柄はよく分からない。幕末～明治初期、瀬戸・美濃系。

20～28は、小型で湯呑みか盃の類。20はコンニャク印判による蔬菜文、21は楓文で、いずれも17世紀末～18世紀初頭のもの。22は、コンニャク印判による草花文、18世紀前～中葉。23～26は、いずれも灰色味をおびる軸調のもの。23・24は18世紀代の雑器窯のもの。25・26は、18世紀中葉～19世紀初頭のもの。25は草花文、26は雲に鶴か。27は、源氏香初音に似せた文様と山水文を描くもの。幕末～明治の瀬戸・美濃系。28は端反し、蛇の目高台のもの。赤絵で、草花文と蝶を描く。17世紀末～18世紀前半のもの。

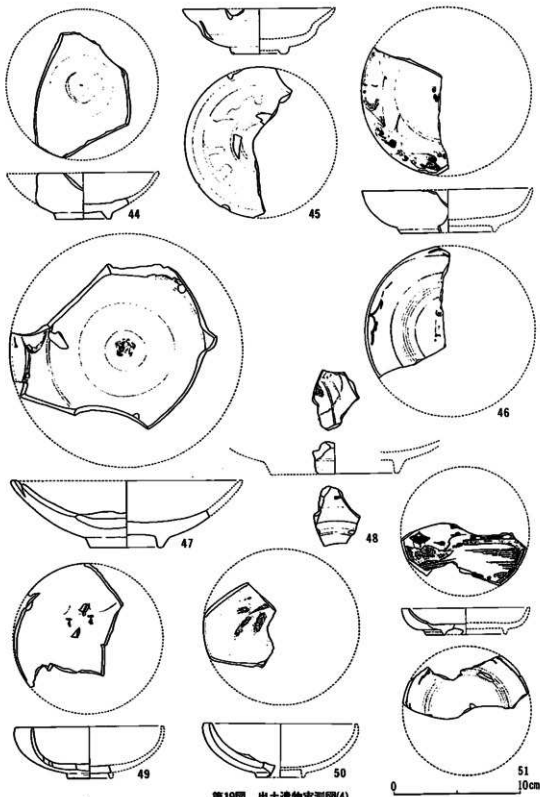
29～31は飯茶碗の蓋。29は18世紀末～19世紀前葉、広東型碗の蓋。牡丹と柳を描くものか。見込は髷。30・31は端反の蓋。30は、外面に小松原文を描き、ふち絵に電光文。31は梅花文、高台内に乾の篆書体の銘が入る。見込は寿字。いずれも、18世紀前葉～幕末のもの。

2) 蓋物類

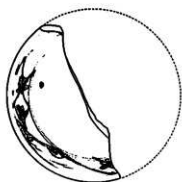
32～36は、口部内側に蓋の当たる軸刺の見られるもの。32は小型のもので、丸の中の墨弾きで描かれた文様は鳥であろうか。18世紀代。33は環珞文、36は蛸唐草のもの、いずれも18世紀末～幕末。34・37は永裂梅花文を描くが同一個体ではない。19世紀初頭～幕末。35は半筒形を呈し、繊細な牡丹文を描く。18世紀後半～19世紀初頭のもの。38は6分の1弱の資料であるが、径8寸を超える蓋で、鈕が付くらしい。濃い呉須で、区画文で山水一屋図を描く。18世紀前～中葉のもの。

3) 皿類

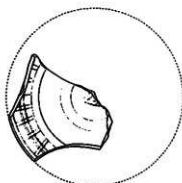
41は中国製、明朝末のもの。同時期の皿は、破片で15個体分ある。これらには独鈞図、蔬菜文、跳魚図、馬図などがある。輪高台、蛇の目高台のものがあり、疊付に砂付のものが多い。41は、草花文のほか印譜が見える。42・43は1630～1650年代の肥前系のもの。42は梅花文、43は山水文で、いずれも砂付の疊付である。44・45は、唐津内野山窯のもの。17世紀末～18世紀前半。胎土は黄褐色気味で陶器質に近い。46は、ふち絵に草花文、高台内に大明□□の銘がある。18世紀代。47は、径が18cm(6寸)のもの。内面に円心円状の軸刺ぎがあり、見込にコンニャク印判による五弁花文が付される。雑器窯のもので1780年までの18世紀代。48は、染付に赤・緑の上絵付をした大皿の破片。17世紀後半～18世紀前半。49・50は18世紀代の関西系。49は鉄絵、50は色絵(緑・赤)のもの。胎土は淡褐色を呈す。51は山水一屋図を描く。18世紀後半～19世紀初頭。62は、ふち絵は竹に梅花文であろうか。蛇の目高台となり、18世紀末～幕末のもの。53はミニサイズで、特殊な用途であろう。若竹文を描き、18世紀代。54・55・57は19



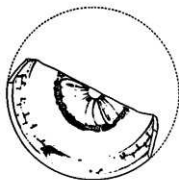
第19圖 出土遺物実測圖(4)



52



55



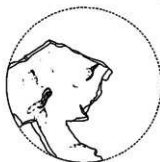
57



53



54



56



58



0 10cm

59

第20图 出土遺物実測図(5)

世紀初～幕末のもの。54は濃い軸調の芙蓉手、見込は花鳥文、高台内に太清年製の銘が入る。55は、同心円状の軸刺のあるもの。57はふち絵は亀甲文、見込は花文か。外面には口と源氏香を模した文様を描く。いずれも蛇の目高台。56は関西系の色絵。高台脇は施軸されていない。全面には細かい貫入がある。18世紀末～幕末。58・59は青磁。58は、1630～1640年の肥前之三脚付大皿。牡丹文を彫るもの。59は、17世紀後半の有田の大皿。

4) 蓋 類

60は大型で、蓋の蓋であろうか。軸調は濃く、抽象化した草花文を描く。裏面は露胎する。鈕は獅子かと思われる。関西系のもの。61は落し蓋で、鈕の有無は分からない。62・63は土瓶の蓋。裏面は露胎し、中央に糸切痕が見える。62は、白泥のほか青緑釉が部分的にかけられる。63は、鉄釉により文様を描くもの。これらは、関西、あるいは東北系のもの。

5) 壺 ・ 甕

64は小型の壺で、成形がよくないのか口部が歪んでいる。胎土は黄褐色を呈し、砂が混じる。65は小型の甕。胎土は赤褐色を呈する。内外面とも鉄釉がけで、底部は露胎する。いずれも、東北地方あたりの産であろうか。

6) 灯 明 皿

土師質で、内面にススが付着している。底面には、糸切痕が見える。

7) 摺 鉢

67～69は、無釉で黄褐色を呈するものである。口部は内切し、1条9線の摺描条線を施すものである。17世紀代の越前系。

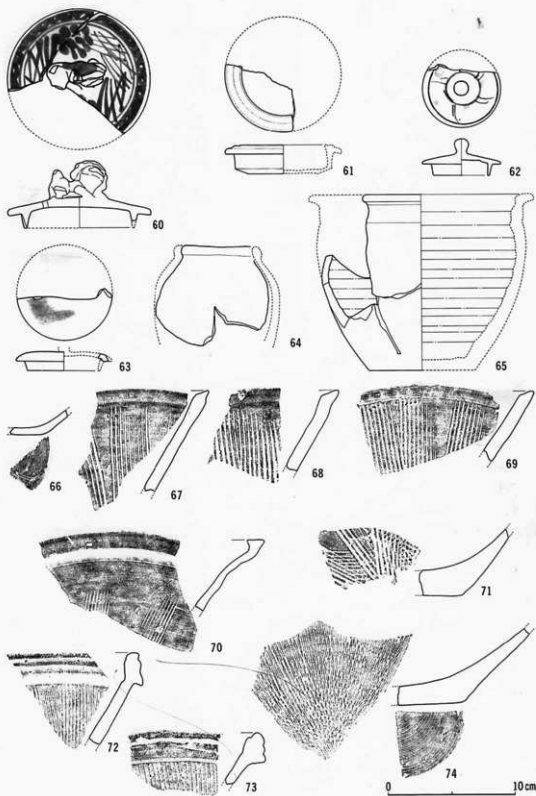
70～74は唐津系のもの。70は口部だけ鉄釉がけされ、1条9線の摺描条線のもの。71は底部資料。いずれも17世紀前半のもの。72は玉縁となり、沈線文の巡るもの。1条10線の摺描条線である。17世紀後半。73は、やはり玉縁となり沈線を巡らす。1条10線の摺描条線で、18世紀終末～19世紀のもの。74は底面に糸切痕の見えるもの。

2. 硯

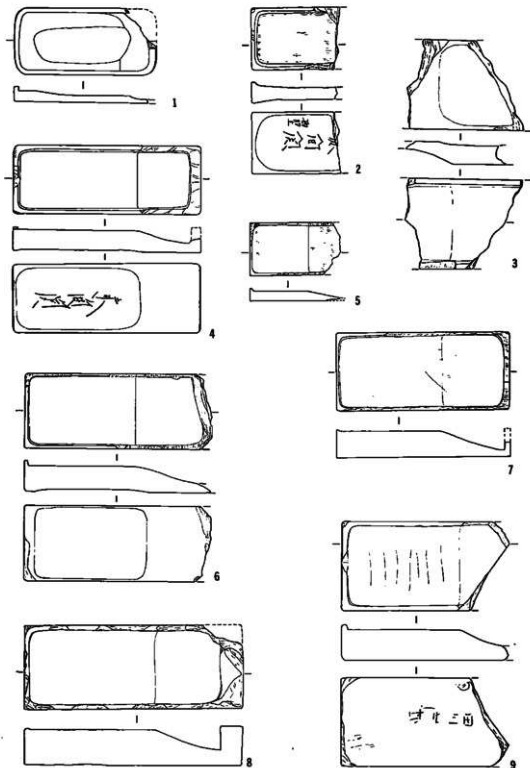
何種類かの硯があったので図示しておいた。(第22図) 1は丸味をおびる薄手のもので、長期間使用したと見えかなり磨耗している。灰色味がかった石材である。2～4は、大きさは若干ちがうものの同一石材であり、赤紫色を呈する。裏面には同一書体で「赤間関」の陰刻があり、2には小さく「勘助主」が加えられている。石材、陰刻から見て、山口県万倉産の輝緑凝灰岩を用いた赤間関硯と思われる。なお、同様のものは、函館市五稜郭出土品にも例がある。

5は、小型、薄手で硯池の欠けるもの。均質な黒色に近い素材である。6は灰黒色、7は黒色に近い石材である。出土層位からみて、表御殿のⅢ・Ⅳ期あたりであるが産地等は不明である。

8・9は同一石材によるもの。黄褐色を呈し、縞模様が見え、軟質な砂岩質の素材である。出土層位からみて、明治33年以前の学童の使用品であろう。9には「田川□□」の陰刻がある。



第21圖 出土遺物実測図(6)



第22圖 出土遺物(7)

3. 金 属 器

金属器類は、瓦に次いで出土が多い。素材別では鉄製品、銅製品、真ちゅう製品がある。用途別では武器、建具、日用品類などに分類できる。代表的なものを図示した。

1) 刀 剣 類 (1～4, 17)

1は短刀。全長25cm程度のもので、目釘孔が1である。17は小刀で、中心（なかご）が3分の1程欠ける。長さ45cm、反り1.1cm、目釘孔が1である。鋸と鐔の一部が付着したままである。鋸は銅製。2～4は、短刀か小刀の一部である。

2) 刀 装 具 (5, 6)

5は鋸、6は切羽で、いずれも銅製である。

3) 刀 子 (7, 8)

何点か出土しているが、形状の分かるものを図示した。7は小刀（こがたな）、8は形状から見て、9～11の小柄とセットになるものであろう。

4) 小 柄 (9～11)

柄が3点出土している。9は海浜図を陽刻するもの。真ちゅう製。10・11は銅製。11には木瓜が陰刻されている。

5) 銃 弾 (12～16)

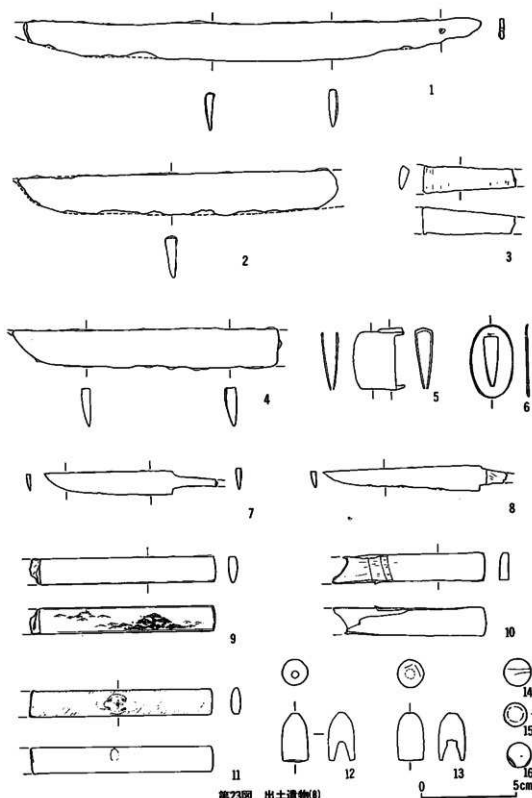
洋式銃（スペンサー連発銃）のものが2発、火縄銃のものが3発あった。いずれも鉛製。洋式銃のものは先端が潰れている。また、薬莢は出土していない。これら銃弾は、L-3区からの出土である。前述したS B-2付近にあった門から直線の位置にあたる調査区で、出土位置、層位からすると、明治元年の戦役に旧幕府軍側の使用したものと思われる。

6) その他金属製品

項を起こさず、一括して説明する。19・19は和鉄の一部。20～23は釘。釘類は鉄製品の中で最も多く、大小各種、形態も変化に富んでおり、代表的なもののみ図示した。24・25は鋸。断面形状の扁平なもの、方形のものがある。26は鉄製引手金具。戸か大型の箱物の引手であろう。27・36は鎌番。27は鉄製で戸か大型の箱物の、36は真ちゅう製で小物類に用いられたもの。28は用途のよく分からないものである。黒漆がけした銅製の覆で、棒状の木部が残る。方形の孔がある。29は鋸金具。銅製で雲形文に打ち出したもの。小さな方形の釘孔があり、表面には黒漆がかけられている。30は座金物の一種か。銅製。37は、小型の銅あるいは燐銅の弦であろう。真ちゅう製。33は簪。小型、真ちゅう製で、頂部が耳掻き状となる。34は鉄製で、孔はないが縫針かと思われる。

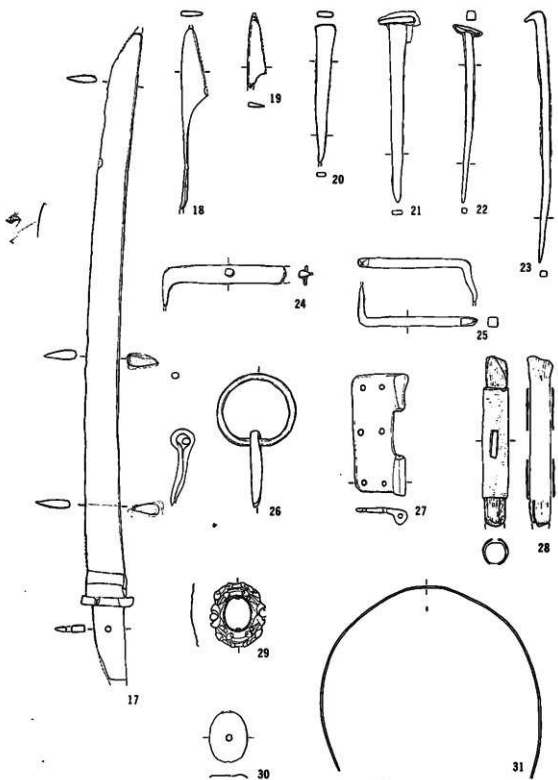
35、37～39は用途不明のもの。35は銅製、留め金具の一種か。37は真ちゅう製の楔状のものと小孔が一つある。38は銅製、39は真ちゅう製。夫々孔が一つある。40は銅製の鈕。蓋の一部である。

41～49は銅釘類。1寸程度のものが多いが、49のように2寸のものもある。また、47のよう

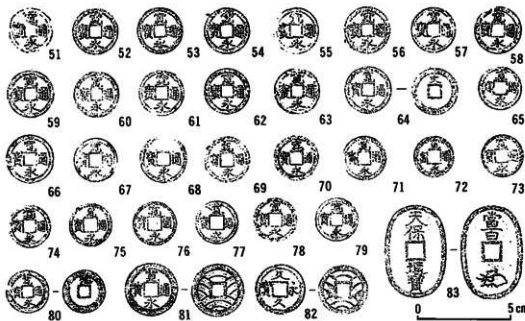
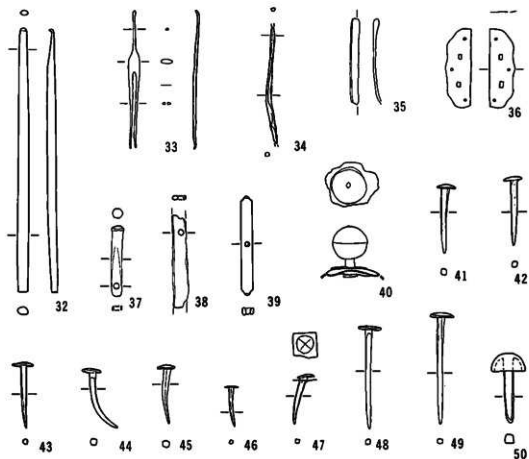


第23図 出土遺物(8)

34



第24図 出土遺物(9)



第25图 出土文物00

に底金の付いたままのものがある。釘とセットになる孔の穿いた銅板がいくつかある。50は銅製の紙。

内. 古 銭

明治以降の小銭もあったが割愛してある。寛永通宝が最も多く、80枚程あった。古寛永（51～63）と新寛永（64～81）がある。鋳造地毎に分けると各種ある。古・新毎に見ても造構との関係は明確にとらえられていない。82は文久永宝、83は天保通宝である。

5. 煙 管（第26図）

雁首と吸口があるが、セットで出土したものはない。雁首は6点（1～6）図示したが、火皿からある程度の長さの部分で曲げてあるもの（1，2）と，3のように火皿からすぐ曲げているものがある。5には羅字の一部が残る。

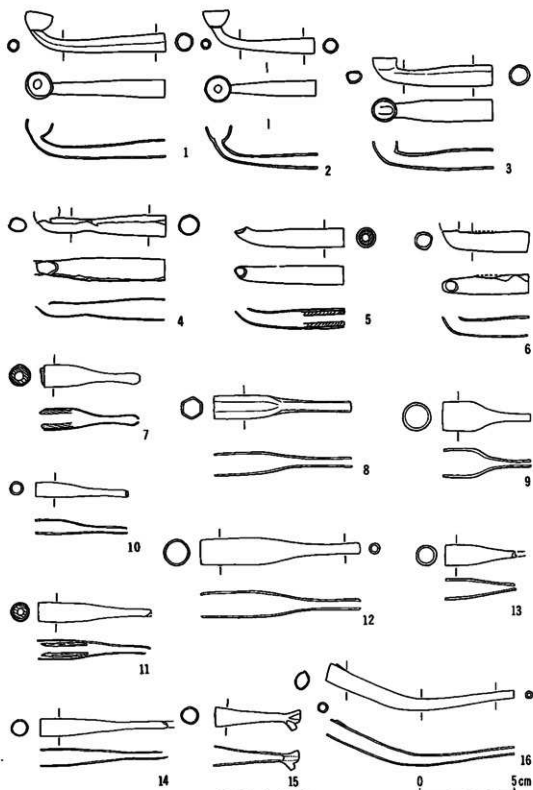
吸口は短いもの，16のように長大なものがある。ソケット部が極端に太いもの（9）や，6角形に整えてあるもの（8）などがある。羅字の一部が残るもの（7，11）がある。雁首，吸口とも全て真ちゅう製。

6. 角 製 耳 搔（第25図32）

鹿角を削り出して作られた耳搔である。装飾的な文様等はない。層位的には，第Ⅰ期に伴うものとみてよい。

7. 自然遺物

図は省略してあるが，埋土中に貝殻，獣骨が若干出土していた。貝殻にはアワビ，サザエ，ホタテ，ハマグリなどあり，ハマグリが最も多い。塗薬の容器として入ってきたものであろう。アワビには方形の孔が3カ所認められるものがあり，三本ヤスの痕跡である。獣骨にはイヌ，ネコがあり，鯉ってはいない。



第26圖 出土遺物10

Ⅳ. ま と め

今年度の調査によって確認できた遺構、出土遺物の概要は前述のとおりである。最後に、調査の成果と今後の課題を記して、若下のまとめとしたい。

調査の最大の目的は、4棟あったといわれる本丸表御殿建物のうち、南側棟の位置、規模等を明らかにすることであった。調査の結果、松城小学校解体跡地から御殿の礎石、同棟の南西隅にあった便所跡が確認できた。遺構の残りが良いのは校舎の下部のみで、校舎から外れる部分では全ての礎石が抜き取られていた。玄関をはじめ、建物の東側隅、建物に付帯する櫓等は、著しい攪乱のため残念乍ら確認するに至らなかった。しかし、便所跡及び玄関から本丸御門へ続く砂利敷のあり方から、明治9年の「渡嶋国津経郡福山旧城内 本丸建物」図と照合するならば、御殿南側棟の位置はほぼ推定することができる。次年度以降の調査によって、北側に連なる建物跡の検出に期待のもたれるところである。そうした成果を待って、部屋割等の細部の検討をしと思う。御殿建物のみならず、これに付帯する井戸・櫓・門・排水施設等を明らかにすることによって、本丸表御殿の姿をより具体的なものにしていかななくてはならない。

校舎解体跡地には、学校を除いて少なくとも4期の建物があると判明した。これらで全てなのか、これらが全て御殿建物なのか、その時期、規模は、といった新たな問題が生じてきた。また、SB-2とした遺構が、現時点では、どの段階と結び付くのか不明のままである。文献史料では、福山城（館）に関する記載は今のところ限られたものしか知られていないが、慶長年間創建及び寛永の再営以外の記録は見えてこない。調査結果を見ると、既知の記録以外にも何度かの増改築が行なわれている可能性は極めて強い。これら4期の建物群は、福山館から福山城に至る複雑な歴史の一端を垣間見せてくれたのである。

調査の主眼からするならば、下部に存在する遺構の確認のために、上部の遺構を破壊してしまうことは避けなければならないが、支障のない範囲で福山館時代の御殿の姿を明らかにしていきたいと思う。また、発掘調査のみならず、文献、絵図等の再吟味、新たな史料の検索を含めた面からの追究の必要は言うまでもない。

西塀石垣については、2カ所のトレンチによってその位置、基礎のあり方、石垣の方向を確かめることができた。縄張り図とは若干のズレのあることも判明した。本丸内では御殿の重要な防衛施設の一つでもあり、この遺構の確認によって御殿の位置が確定してくるという意味も持つのである。また、近い将来の環境整備事業にあたって、御殿周辺の修景を図るうえでも、この遺構の存在は無視できない。そうした観点からも、石垣の延長は確かめておかなくてはならない。

中世墳墓の発見は予想外といってよい。松前・上ノ国地方では中世の一般的な葬法の一つであり、葬例をまた一つ追加したことになる。今年度の発見が単独なのか、群集するものか明らかにし得なかったが、夷王山墳墓群、上川遺跡の例からすると群集するあり方かもしれない。

大館の存続期に、この台地一帯が何らかの形で利用されていたのは当然として、墓域というあり方も含めて、今後の調査では遺構、遺物の状況に十分配慮しなければならない。こうしたことが、将来計画されている史跡大館の環境整備事業に密接な繋がりをもってくるのである。

出土遺物では、磁器については、福山城内におけるあり方が難気ながら分かってきた。

I期の段階では大館からの伝世品がどの程度で、産地別ではどのものが、どのような割合で入っているか確たることは分らないが、舶載品が相当量使用されていたことは確実であろう。その後、肥前方面の生産量の増加とともに、肥前産のものが幕末期まで、実に多種多様に搬入されていることが分かった。当然のことながら、1600年代から幕末に至る各期の資料が連続とつづいている。ただ城址内という性格上、高級品の比率が高いのは妥当としても、これが松前市中、他地域ではどうかという点では興味もたれる。

日本海交易のあり方からするならば肥前方面の製品が多いのは当然として、幕末～明治初期になって、瀬戸・美濃系の製品が大量に見えてくるが、どのような流通形態を経て松前に入ってくるのか興味深い。

陶器・瓦については、十分な余裕がないため、ほとんどふれずじまいであった。また、磁器の組成、遺構との関係と合わせ、年代、産地別に吟味していく必要がある。

硯の中で、赤間関硯の出土は述べた。赤間関（下関）は、北前船の寄港地の一つであり、ここから積載されたのは確実であり、五稜郭出土品との関連から幕末の製品とみてよい。

圖 版

図版1 調査状況・遺構



調査開始前の状況



本丸表御殿礎石(西から)



本丸表御殿礎石(東から)



第Ⅲ期、Ⅳ期礎石



玄関部分近景(北側より)



南西隅便槽跡

図版4 遺構



西塀石垣根伐り断面



西塀石垣コーナー部



第Ⅳ期礎石下部状況



第Ⅱ期礎石抜取跡断面



不明建物(SB-2)



中世墳墓

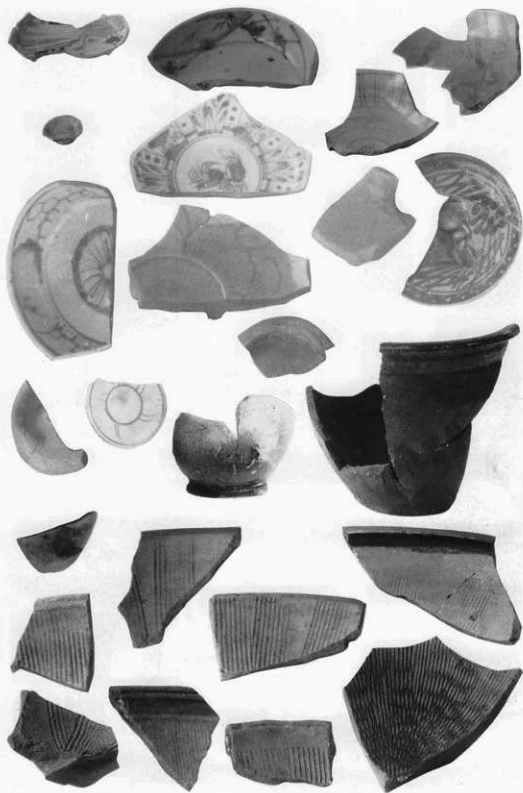
図版7 出土遺物(1)



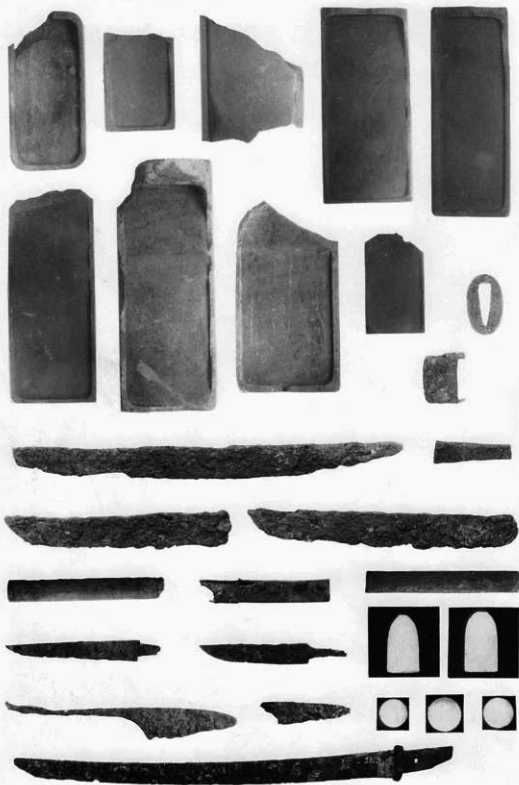
図版8 出土遺物(2)



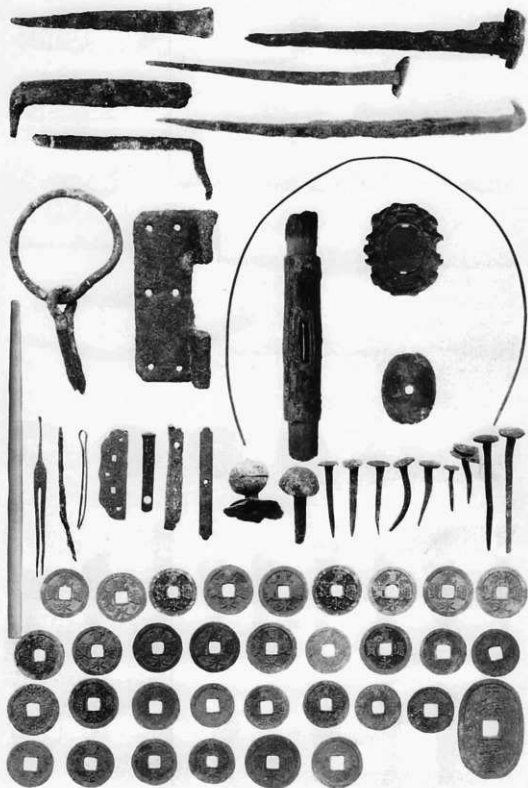
図版9 出土遺物(3)



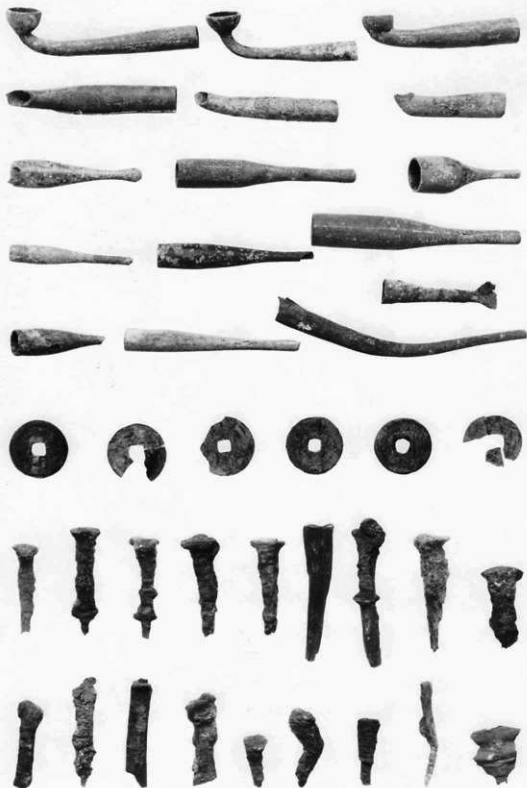
图版10 出土遺物(4)



图版11 出土遺物(5)



图版12 出土文物(6)



史跡福山城 V

発行日 昭和63年3月25日

発 行 北海道松前町教育委員会

印刷所 ㈱北海道機関紙印刷所

史跡福山城Ⅴ
昭和 62 年度 発掘調査概要報告
電子版

2025 年 2 月 20 日 第 1 刷

発行者 北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060 / FAX:0139-42-2211

WEB:<https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/>

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：史跡福山城Ⅴ 昭和 62 年度 発掘調査概要報告
(1988 年 北海道松前町教育委員会発行)

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。